様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２７２５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２８２

研究課題名（和文）中国石窟摩崖における維摩経変図像の調査研究

研究課題名（英文）Research and Iconographical Study of Vimalakirti Scene Representations in Caves and Grottos in China

研究代表者
濱田　瑞美（Hamada, Tamami）

横浜美術大学・美術学部・准教授

研究者番号：３０３６７１４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国の石窟摩崖にあらわされた維摩経変を実地調査して得た知見をもとに、その図像研究を行うものである。維摩経変の図像データと題記や関連文献との照合に加え、石窟摩崖という宗教的空間における維摩経変の配置の意味や、他の図像との関係を考察することで、南北朝時代から宋代の維摩経変の時代・地域ごとの図像的特徴を明らかにしたとともに、中国の仏国土化という中国の維摩経変として重要なテーマを唐代の作例に読み解くことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、仏教美術史の研究において重要な経変研究を推進したのみならず、中国の維摩経変の図像内容を墨書題記や『維摩経』の各訳本や関連注疏と照合しつつ解明を行った成果は、美術史や図像学のほか、仏教学・仏教史・歴史学など他分野にも寄与できるものである。加えて本研究で明らかとなった石窟空間における図像構成や図像配置の意味は、他の仏教図像や宗教美術の研究に対しても有効な視点・方法を提示するものとして敷衍性を有している。

研究成果の概要（英文）：This is an iconographical study of Vimalakirti Scene representations based on field research of caves and grottos located in China. Comparison of the image data of these works with sutra chapter titles and associated literature, together with examination of the spatial arrangement of these works in caves as religious spaces, and their relationship with other images, has revealed iconographical characteristics of Vimalakirti Scene representations varying according to region and age, from the Northern and Southern dynasty period to the Song dynasty period, and has led to a conclusion that Tang period Vimalakirti Scene paintings suggest that the Chinese empire should be a Buddha land.

研究分野：東洋美術史、仏教美術史

キーワード：仏教美術　　図像研究　　図像構成　　石窟空間　維摩経変　　敦煌

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「維摩経変」とは、中インド・ヴァイシャーリーの長者ヴィマラキールティ（維摩詰）を主人公とする『維摩経』の内容を図像化したものであるが、興味深いのは、インドに維摩経変の作例が無い一方、中国では南北朝時代以降、夥しい数の作例が認められることである。この中国での流行は、『維摩経』に説かれる般若の「空」の思想が中国古来の老荘思想の「無」に通じるものとして中国の知識層に受け入れられたことを示している。また、維摩経変にあらわされる維摩詰居士の服装は中国士大夫の姿に近似しており、在家で仏教を信奉する彼らが、維摩詰に自身を重ね合わせやすかったものと推測される。以上の面から、維摩経変はインド由来である仏教の、中国における受容の実相を体現するものとして非常に重要な作例としてみなされる。しかも、維摩経変は時代を通じて絶え間なく制作されており、中国の南北朝時代から宋代までの凡そ 800 年余りにわたる経変の図像および思想背景の変容を追うことのできる格好の素材なのである。

しかしながら、先行研究は多くはない。主要な先行研究として、敦煌の維摩経変全体を扱った賀世哲氏の論考（「敦煌莫高窟壁畫中的《維摩詰經變》」『敦煌研究』2、1983 年）、および維摩・文殊の対置表現を論じた石松日奈子氏の論考（「維摩・文殊像の研究―中国南北朝仏教美術における左右対置表現の一例として―」『南都仏教』71、1995 年）等が挙げられるが、これらが上梓されて既に 2、30 年以上経過している。一方、近年中国では地方の石窟摩崖の調査が進むなか、続々と新たな作例が知られてきている。ただ、それらの作例は未公表のものも多い。たとえ既に公表されている作例であったとしても図像研究が可能な程度に詳細の分かるものは非常に少ない。そのため、実地の調査による詳細な図像データの取得と、それに基づく図像研究の推進が求められる状況にあった。

また、従来の図像研究は個別の作例やその図像のみを扱う研究が主流であった。しかし石窟や摩崖といった宗教的空間では、維摩経変のほかにも多くの尊像・図像がつくられている。それらの中で、維摩経変はどのような意図をもってどのように配置され、他の図像とどのような関係性にあったのか。こうした全体の図像構成を踏まえた視点は、石窟摩崖にあらわされた経変図を読み解く上で非常に有効である。

２．研究の目的

本研究は、中国の南北朝時代から宋時代までの石窟および摩崖造像にあらわれる維摩経変を実地に調査して作例・所在・図像に関するデータを集積し、その基礎データを基に、維摩経変の個々の作例あるいは時代・地域別の図像学的研究を行うとともに、石窟または摩崖造像という宗教的な空間において維摩経変が他の図像とどのような関係をもって表されているのかなど、全体的な図像構成の観点から維摩経変を考察することを通して、中国における仏教受容の実相の一端を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

(1)中国の南北朝時代から宋時代までの石窟摩崖にあらわされた維摩経変の実地調査を行い、基礎的な図像データを取得する。

(2)集積したデータを基に、時代・地域別の維摩経変の図像的特徴について考察する。

(3)図像解読において『維摩経』の各訳本・注疏との照合を行う。

(4)維摩経変それ自体の図像のみだけでなく、他の尊像や図像との組み合わせや、石窟摩崖の空間内における維摩経変の配置など、全体の図像構成から維摩経変の意義を考察する。

４．研究成果

本研究において維摩経変を実地に調査した石窟摩崖は、龍門石窟、鞏県石窟、水泉石窟、炳霊寺石窟、敦煌莫高窟、楡林窟、拝錫哈石窟である。研究成果の内容は以下の通りである。

(1)中国南北朝時代の維摩経変図像

南北朝時代の維摩経変の特徴として、維摩詰像と文殊菩薩像を仏龕や壁面の左右に振り分け配置する作例が多い。しかし、炳霊寺石窟の北魏時代の作例は、弥勒菩薩に取り替わるかたちで維摩経変があらわされている例を確認することができた。このことは、同時期の維摩経変が弥勒菩薩と類似の意義を有していた可能性を示すものであり、維摩経変が単に当時流行していた『維摩経』の内容を造形化したものであるという以上に、釈迦多宝の二仏並坐像や弥勒菩薩像等に象徴されるような仏法相承の一モティーフとして石窟摩崖に造形されていたことを示唆するものとみられる。

(2)隋時代の維摩経変図像

敦煌莫高窟の隋時代の維摩経変 11 件の各作例の図像および窟内での配置、尊像や他図像との組み合わせを調査したところ、11 作例中 9 例が窟内正面の本尊釈迦仏に付属する図像であること、大半の作例が窟の天井や壁の上部など高い位置に配されていること、弥勒菩薩や二仏並坐の図像と積極的に組み合わることを確認できた。こうした図像の組み合わせと窟内の配置から、敦煌隋代の維摩経変は、釈迦の娑婆世界が清浄な仏土であることを示すという釈迦仏世界の補足説明的な役割を有するとともに、娑婆世界と天宮世界との連繋をも示唆するモティーフとし

てあらわされたという結論を導き出した。

(3)唐宋時代敦煌石窟の維摩経変図像と墨書題記

敦煌地域の唐宋時代の石窟に描かれた維摩経変のいくつかは、墨書題記を伴っている。本研究では、敦煌莫高窟に計 11 窟、瓜州榆林窟に 1 窟、題記を伴う維摩経変を確認した。それらの題記には、尊名のみのシンプルなものから、経文を記したものまである。特に五代の石窟の維摩経変の図中の各所に付された題記は、文字数も非常に多く、対応する図像および経軌との照合が可能である。

題記からの考察による本研究の成果の一つは、唐の太宗から高宗期の敦煌莫高窟の維摩経変において、図中の維摩詰像に付された題記の尊名「無垢稱菩薩」から、同維摩経変の典拠が玄奘訳『説無垢称経』であることを見出したことである。同図は石窟正面の仏龕の内壁に描かれる維摩経変であるが、同時期・同形式の他の維摩経変も玄奘訳に依拠したものである可能性が高い。羅什訳とは異なる玄奘訳の特徴を踏まえ、これら同形式の維摩経変の図像を解釈することに成功した。加えて、玄奘訳の経典に基づく仏教美術作例の具体例を示し得たことは、これまで注目されてこなかった玄奘訳の造形への影響を考えていく上でも重要である。

(4)唐代以降の維摩経変図像

唐代以降の維摩経変には『維摩経』の各品の内容をあらわすモティーフが図中にちりばめられ、詳しい内容の図像に変化した。特に画面に印象深くあらわされるのが、維摩詰の神通力で妙喜世界を切り取って皆に見せる「見阿閦仏品」や、皆を釈迦の元に連れていく「菩薩行品」であるが、これは別の仏浄土世界を娑婆世界の穢土に持ち来るという維摩詰の能力を表現したものとみられ、維摩経変のテーマの一つが穢土の仏土化であることが強調されているといえる。加えて、唐代以降の維摩経変には基本的に中国皇帝の姿が描かれており、中国の世俗権と仏教との関わりが明確に表現されている。こうした特徴的なモティーフを伴う唐代以降の維摩経変には、維摩詰と文殊菩薩の弁論の場が中国の国土であるとともに、中国の仏国土化が中国皇帝によって成されるものであることが示唆されていると考えられる。

(5)維摩経変の窟内配置と図像内容との関係

初唐期の敦煌莫高窟に描かれた維摩経変は窟内での配置にバリエーションがあり、そのうち北壁に維摩経変があらわされる例がある。敦煌莫高窟は正面が西、向かって右手側が北壁である。この北壁は、他の初唐窟において東方薬師浄土変が描かれることから、方角として東方を示唆していることがわかる。なお、相対する南壁には西方阿弥陀浄土変が描かれる例が多数みられる。上述したように、維摩経変が中国を強調した図像内容であることを念頭に置くならば、北壁に描かれた維摩経変には、南壁の西方阿弥陀浄土、および正面西壁のインドの釈迦世界に対し、東方の中国のイメージが投影されているとみることができる。さらに、他窟における過去世・現在世・未来世の三世仏の図像配置の例から、北壁は未来世を暗示する位置でもあることが分かる。維摩経変が仏滅後の仏法相承というテーマを有していることを考慮したとき、北壁に描かれた維摩経変には、中国が未来世に引き継がれるべき仏法相承の地であるとの含意を読み取ることが可能である。

以上のように、窟内における壁画の配置と主題選択・図像の意味とが有機的に関連していることを、本研究によって具体的に解明することができたとともに、釈迦不在の辺土たる中国という意識の中で、インド由来の仏教を中国的に解釈し、受容してきた実相の一端を、維摩経変の作例に確認することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①濱田瑞美、敦煌莫高窟隋代の維摩経変について、横浜美術大学教育・研究紀要、査読無、9 号、2019、pp.69-84

②濱田瑞美、唐代敦煌与日本的維摩詰経変、絲綢之路研究集刊、査読無、第 3 輯、2019、pp.95-108

③濱田瑞美、中国南北朝期石窟の維摩経変について、横浜美術大学教育・研究紀要、査読無、8 号、2018、pp.69-85

④濱田瑞美、関于莫高窟隋代維摩詰経変的図像組合―通過与其他地区南北朝時期維摩詰経変比較―、大足学刊、査読無、第 3 輯、2019 刊行予定

〔学会発表〕（計 3 件）

①濱田瑞美、敦煌石窟壁画的窟内配置与図像研究、観念･技術　視野･視角　敦煌石窟研究方法

論国際学術研討会、2018
②濱田瑞美、関于莫高窟隋代維摩詰経変的図像組合、2017 敦煌論壇:伝承与創新――紀念段文杰先生誕辰 100 周年敦煌与絲稠之路国際学術研討会、2017
③濱田瑞美、唐代敦煌与日本的維摩詰経変、絲綢之路上的敦煌与長安国際学術研討会 ――暨中国敦煌吐魯番学会 2017 年理事会、2017

〔図書〕（計 1 件）
①濱田瑞美他、中央公論美術出版、アジア仏教美術論集 東アジアⅡ（隋・唐）、2019、総 636 頁

６．研究組織

(1)研究分担者：無

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。